

東京藝術大学大学院
Tokyo University of the Arts

国際芸術創造研究科
Graduate School of Global Arts

修士論文要旨集 2018
Master Thesis Abstracts

石橋 鼓太郎

Kotaro ISHIBASHI

ジョン・パイレス

Jong PAIREZ

金 奉洙

Bongsou KIM

鈴木 葉二

Yohji SUZUKI

宮川 緑

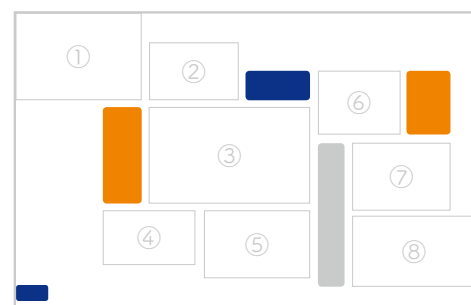
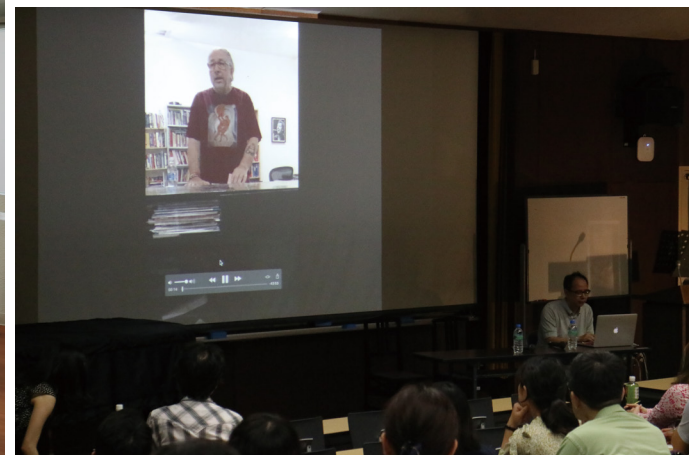
Midori MIYAKAWA

内海 潤也

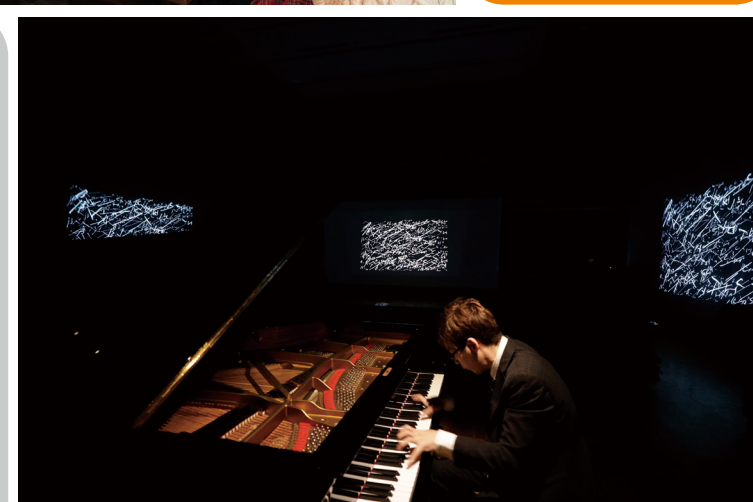
Junya UTSUMI

GA

Tokyo University of the Arts
Graduate School of Global Arts,
Department of Arts Studies and Curatorial Practices



- ①授業風景 / A Seminar (2016.4.11)
- ②連続レクチャー「グローバル時代のアート・都市・コミュニティ」第1回 ローレンス・グロスバーク「ロスト・イン・ア・ロスト・ワールド：存在論的現実性の危うさについて」 / Lecture Series "Arts, City and Community in the Age of Globalization" The 1st Session: Lawrence Grossberg: Lost in a Lost World: On the Dangers of Ontological Certainty (2016.7.1)
- ③住友研究室 / Sumitomo Laboratory (2016)
- ④グローバル時代の芸術文化概論 ブルノ・ラトゥール / Special Lecture Art and Culture in the Age of Globalization: Bruno Latour (2016.7.15)
- ⑤連続レクチャー「グローバル時代のアート・都市・コミュニティ」第2回 ジェームズ・タイソン / Lecture Series "Arts, City and Community in the Age of Globalization" The 2nd Session: James Tyson (2016.7.23)
- ⑥グローバル時代の芸術文化概論 アンセルム・フランケ / Special Lecture Art and Culture in the Age of Globalization: Anselm Franke (2016.11.21)
- ⑦特別演奏会「BACH CONCERT : MUSIC x TYPOGRAPHY」 (2016.11.23)
- ⑧ジャネット・ピライ / Janet Pillai (2016.12.6)



東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 修士論文要旨集 2018

発行日：平成 30 年 3 月 26 日

編集：山崎朋（東京藝術大学）、谷地田未緒（東京藝術大学）、木村重樹

デザイン：福西想人

発行：東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科

《上野キャンパス》

〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8

東京藝術大学上野キャンパス 大学会館 2 階

国際芸術創造研究科教員室

TEL：050-5525-2725 FAX：03-6846-8685

《千住キャンパス》

〒120-0034 東京都足立区千住 1-25-1

東京藝術大学千住キャンパス

国際芸術創造研究科教員室

TEL：050-5525-2732 FAX：03-5284-1577

Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts, Master Thesis Abstracts 2018

26 March, 2018 (First Edition)

Editors: Tomo YAMAZAKI, Mio YACHITA, Shigeki KIMURA

Design: Thought FUKUNISHI

Published by: Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts

Ueno Campus:

12-8 Ueno Park, Taito-ku, TOKYO 110-8714 JAPAN

Phone: +81 (0)50-5525-2725

Senju Campus:

1-25-1 Senju, Adachi-ku, TOKYO 120-0034 JAPAN

Phone: +81 (0)50-5525-2732

| <http://ga.geidai.ac.jp/>

東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 修士論文要旨集

Tokyo University of the Arts,
Graduate School of Global Arts,
Master Thesis Abstracts

2018

国際芸術創造研究科にとって初の修了生を送り出すことができるのは、教員・スタッフ一同にとって、大きな喜びです。藝大にとって実験的な試みとして2016年に設立された国際芸術創造研究科は、芸術と社会の関係を研究し、芸術と社会の「つなぎ手」を主に育てる大学院研究科です。実践を重んじる本学の伝統にのっとり、修了研究では論文に加えて、文化事業の企画運営をおこなうことが認められています。生まれたばかりの新研究科は試行錯誤の連続ですが、その中でたくましく育ってくれた一期生のみなさんを心より称え、そして彼らを温かく支えてくれた大学関係者および研究科スタッフのみなさまに、深く御礼申し上げます。

さて、栄えある一期生を送り出すにあたり、私たちは旅発つ若者たちを「Larus」と称し、最も優れた修了研究を修めた学生に「Larus 賞」を授与することにいたしました。Larus とはラテン語でカモメ。私たちはこの言葉に「渡り鳥」という意味を込めて、世界各地を飛びまわり、旅発つ彼らが、今後さまざまな場所やさまざまな人をつないで活躍してくれることを祈ることといたしました。

彼らの修了研究を記した本冊子から、若き渡り鳥たちの羽ばたきを感じ取っていただければ幸いです。

2018年3月

熊倉 純子

東京藝術大学大学院
国際芸術創造研究科 研究科長

We, the faculty and staff of the Graduate School of Global Arts, are thrilled to be able to send off our very first graduates. The Graduate School of Global Arts was established at Tokyo University of the Arts in 2016 as an experimental program to research the relationships between art and society and cultivate “liaisons” to serve as intermediaries between the two. Out of respect for our university’s tradition of emphasizing practice, we accept the planning and conducting of cultural activities in addition to theses for graduate research. As a newborn field of study, we are in a constant state of trial and error, and I have the utmost respect for our first cohort of students who grew up firm and strong in the midst of it all. I would also like to express my deepest gratitude to the university faculty, staff and everyone else who supported them in their study and growth.

We call our graduates “Larus,” Latin for seagull, and as we send them out of the nest and on to their journeys in life, we grant the student with the most exceptional research the “Larus Award.” We chose the name of a migratory bird as a prayer that these young men and women will fly off to many different places, connect and work with many different people, and be active in a variety of fields.

It is my hope that you can hear the wingbeats of these young migratory birds in the pages of this book detailing their graduate research.

March 2018

Sumiko KUMAKURA

The Dean of Graduate School of Global Arts
Tokyo University of the Arts

共創的音楽実践における参加の様態に関する研究 ——「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」の分析から

A Research about Forms of Participation in Co-creative Music Practice :
An Analysis of “Makoto Nomura Senju Dajare Music Festival”

石橋 鼓太郎 Kotaro ISHIBASHI

私は、修士論文の中で、多様な背景を持った人々が共に音楽を創造する「共創的音楽実践」を、「参加」という視点から分析し、その新たな意義を提示しました。

まず議論に先立って序章の中で、共創的音楽実践の歴史の変遷を、実験音楽・不確定性の音楽、音楽教育、音楽療法、コミュニティ音楽、そしてアートプロジェクト・芸術祭などの隣接領域との関係において辿っています。それらを対象とした近年の研究においては、参加者の実際のふるまいに即した分析が不足していると考えられます。

本論は大きく2部に分かれています。第1部では、共創的音楽実践の分析にあたり適切なアプローチや理論的枠組みについての検討を行い、第2部では、研究事例として、市民参加型の音楽プロジェクト「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」と演奏団体「だじゃれ音楽研究会」を分析・考察しました。

最近の参加型アートに関する近年の議論を参照すれば、美的価値と社会的価値を同一平面上に捉える「関係性」が重要なものになりつつあります。それは、アーティストによって一義的に決められるのではなく、偶発的・不確定的に変動するものです。とすれば、その様態を参加者の行為に即してエスノグラフィックに研究することが必要ではないでしょうか。そのためには、安易なコミュニティへの同一化や一体感を重視する従来の民族音楽学的なアプローチから脱し、近年の音楽学や民族音楽学、相互行為論、状況的学習論などの発展を踏まえた上で、参加者の行為が多層的・複数的なコンテキストと共に織り込まれながら、



2014年10月、コンサート「千住の1010人」
Oct. 2014, at the concert 1010 people in Senju.

practice. Chapter One reviews arguments about participatory art. Based on the concept of "relationships," which can change contingently on many things, it is suggested that ethnographic research based on behavior of participants is required. Chapter Two reviews arguments about musicology, ethnomusicology, interaction theory and situated learning theory. The conventional approach which puts emphasis on a sameness in community is criticized, and a new approach in which the behavior of participants is woven together into a multilayered and varied context and then bound and unraveled is suggested.



2015年12月、タイ・バンコクでの即興演奏
Dec. 2015, improvisation at Bangkok, Thailand.



2016年12月、インドネシア・ジャティノム村での即興演奏
Dec. 2016, improvisation at Jatinom village, Indonesia.

Part Two analyzes the “Makoto Nomura Senju Dajare Music Festival” and “Dajare Music Community Band” as case studies. Chapter Three follows the transition of the structure of these projects. It suggests that these projects give rise to “participation which induces participation.” Chapter Four investigates the organization of the community through the behavior of participants. This chapter clarifies that participants engage in these projects naturally based on their interests, and that they reach across different communities, which induce the participation of others. Chapter Five analyzes musical interaction. This part makes evident that participants “drift”

他者の行為と結ばれたりほどけたりすることで実践に生じる力学に焦点を当てた研究アプローチが必要なのです。

本論文の第2部では、はじめに、私が参与観察を行った「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」のプロジェクト構造の変遷と、それに伴う参加者の役割の変化を概観しています。そこから見えてくるのは、だじゃれ音楽研究会メンバーの実践と主催者の決定が共に織り込まれながら、近年の活動において「参加を誘発する参加」が発生しつつあるということです。次に、だじゃれ音楽研究会というコミュニティへの参加の様態や、それによるコミュニティの構成に着目すると、その時々興味に即してコミュニティ間を越境する自然な関わり方が、参加にあたっての障壁を低くしていることがわかります。さらに、音楽的相互行為がおこなわれている場面の分析からは、他者の音との偶発的な重なり合いに基づき即興演奏をおこなう美的態度によって、場の枠組みが緩やかに変容し、他者の参加が誘発されていることが理解できます。

こうした出来事は、人類学者ティム・インゴルドの「メッシュワーク」という概念を通じて理解できるかもしれません。だじゃれ音楽研究会のメンバーは、各々が気ままに漂流するように行為しつつ、それが他者の行為と偶発的に結ばれほどけていく過程やその質感に対する享乐的な態度に基づいて参加しています。そして、それが他者の参加を誘発することで、音楽による「共創」が立ち上がっていくのです。

through sounds in a way and leave their behavior to overlap with others’ sounds. This attitude causes a change of the framework of the scene and induces others’ participation.

文化芸術施設としての近代産業遺産

——保存とリノベーションに関する日韓の事例比較研究

A comparative study on preservation and renovation of modern industrial heritage as culture and arts facilities in Japan and Korea

金 奉洙 Bongsou KIM

私の研究は、文化芸術施設として保存・リノベーションされた近代産業遺産に関する日本と韓国における事例の比較研究です。

18世紀から20世紀にかけて起こった産業革命と近代化の過程の中で、世界各地域に建設された数多くの産業施設は、地域の経済的な成長を主導し、都市、さらには農山漁村までも発展させました。しかし、21世紀現在、産業の主軸が、製造業からサービスや金融、情報産業へと移り変わり、生産拠点がグローバル化する中で、当時、建設された産業施設の多くは、撤去され、存在していたとしても廃墟の状態のままです。こうした状況において、1973年に英国を中心に国際産業遺産保存委員会（TICCIH/The International Conference on the Conservation of the Industrial Heritage）が設置されたことをきっかけに、すでに歴史的寿命を終えた旧来の産業施設が、その時代の文化と社会に重要な役割を果たしてきたという価値を与えられ「近代産業遺産」という概念のもとで保存され始めました。さらに1990年代頃からは、単に保存するだけにとどまらず新たに文化芸術施設へと生まれ変わる事例が徐々に増えています。

私の研究では日本と韓国の五つの代表的な事例に注目し、近代産業遺産の保存とリノベーションに関して比較分析を行いました。特に、ここでは、日韓の産業化と近代化の時期や形態がやや異なるので、単なる産



下山芸術の森 発電所美術館
Nizayama Forest Art Museum



犬島精錬所美術館
Inujima Seirenscho Art Museum



仁川アートプラットフォーム
Incheon Art Platform



清州煙草製造倉
Cheongju Tobacco Processing Plant



F1963

業廃墟ではなく、「遺産」として認識され始めたその歴史や概念を産業考古学とTICCIHの観点から明らかにしました。続いて、近代産業遺産が新たな文化芸術施設として保存・リノベーションされ始めたその背景と方法について日韓の五つの事例を分析し、両者の異なる思想や哲学を中心に考察しました。最後に、両者の近代産業遺産に対する認識、文化政策、そして「遺産」を取り巻く保存とリノベーションのあり方について、歴史的、場所的、環境的^{エコロジー}な文脈（コンテキスト）とともに芸術的な内容（コンテンツ）を中心に考察することによって、日韓両国における近代産業遺産の保存の背景と思想、そしてリノベーションのあり方を明らかにしました。

今後、旧来の産業施設を「近代産業遺産」として認識し、その「遺産」を美術館などの文化芸術施設として保存・リノベーションするのであれば、芸術的な内容とともに既存の近代産業遺産そのものが内包している歴史的、場所的、環境的文脈を脱文脈化させるのではなく、再文脈化させるあり方を提示することが必要だと考えられます。

This thesis is a comparative study of cases of preserved and renovated modern industrial heritages used as culture and arts facilities in Japan and Korea. In the course of the Industrial Revolution and modernization from the 18th to the 20th centuries, numerous industrial facilities were constructed in different regions of the world. At that time, industrial facilities led the economic growth of regions, developed cities and even rural areas. As of the 21st century, however, the pivot of industry changed from manufacturing to services, finance and information. And with the production base becoming global, many of the industrial facilities built at that time have been demolished or have fallen into a ruined state.

However, in Britain in 1973, with the establishment of TICCIH (The International Conference on the Conservation of the Industrial Heritage); these facilities began to be preserved under the concept of "modern industrial heritage," recognizing the value of old industrial facilities and the important role that those facilities that had already exhausted their historical lives played in the culture and society of their time. Since the 1990s, more and more facilities have been reborn as culture and arts facilities rather than just remaining preserved in their original states.

Among these many cases, this thesis compares and analyzes the preservation and renovation of modern industrial heritages with attention given to five representative cases from

Japan and Korea. In particular, the periods of industrialization and modernization of Japan and Korea are slightly different, therefore in this thesis the history and concepts that began to be recognized as "heritage," not just industrial facilities, are clearly explained from the perspectives of industrial archaeology and TICCIH. Following that, the analysis of the five cases of Korea and Japan is explained in terms of the backgrounds and methods in which modern industrial heritages were preserved and renovated as new culture and arts facilities, and the differences between the ideologies and philosophies of the two are discussed. Finally, the gap between the historical background and ideologies concerning renovation of modern industrial heritages of the two

countries is clarified in historical, geographical and environmental contexts, giving consideration to an awareness of modern industrial heritages by both sides, cultural policies, and the basic direction of conservation and renovation surrounding "heritages."

Furthermore, if an old industrial facility is perceived as a "modern industrial heritage" and its "heritage" is preserved and renovated as a culture and arts facilities, such as an art museum, this thesis proposes a direction of recontextualization rather than contextualizing the historical, geographical, and environmental connotations in existing modern industrial heritages with artistic content.

美術館における鑑賞者の「他者」への応答可能性 ——「アジアをつなぐー境界を生きる女たち 1984-2012」を中心に

Responsibility of the Museum Audience towards “the other”
Focusing on the exhibition “Women In-Between: Asian Women Artists 1984-2012”

宮川 緑 Midori MIYAKAWA

2012 年から 2013 年に福岡アジア美術館など全国 4 カ所で「アジアをつなぐー境界を生きる女たち 1984-2012」と題された展覧会が開催されました。私の論文では、この展覧会を中心に、鑑賞者の「他者」に対する応答可能性について考察しました。

論文は大きく四章からなります。第一章では、研究動機、展覧会の概要、会場となった福岡アジア美術館の略歴を確認しました。第二章では、90 年代後半のジェンダー論争を整理し、そこで打ち出された問題意識について検討しました。いまだに美術館や博物館の展示においては根強い性差別が残存しています。日本の植民地支配が及んだ地域と関わりのある日本の作家や作品、メディア表象の中には、固定化されたジェンダーを見ることができます。そこには、植民地の側が「内地」、および「外地」の女性の身体を性的対象として消費する態度を見いだせるのです。植民地における展覧会では、そうした姿勢が発揮されてきたということが出来ます。

第三章では、作家へのインタビューを通じて変化した私自身の問題意識を整理しました。私がインタビューした作家には、他者の記憶や経験に寄り添い、他者の「痛み」を語ることの「加害者性」を自覚し、かつその責任を引き受ける姿勢がありました。その姿



「アジアをつなぐー境界を生きる女たち 1984-2012」図録
「Women In-Between: Asian Women Artists 1984-2012」Exhibition Catalogue

This thesis aims to discuss the responsibility of the museum audience towards ‘the other’, focusing on the exhibition “Women In-Between: Asian Women Artists 1984-2012” which was held from 2012 to 2013 across four art museums in Japan, including the Fukuoka Asian Art Museum.

In the first chapter, the author tries to clarify the motives of this research along with a brief introduction of the exhibition and the Fukuoka Asian Art Museum. The next chapter discusses ‘the gender controversy’ which broke out in the late 90’s, that still remains as an ongoing issue regarding strong gender discrimination in museum exhibitions in Japan.

The chapter also focused on the representation of women in the media and in the areas which were colonized by Japan in the early to mid-20th century. By looking at the issues of women whose images have been represented and consumed by masculine culture, the author hopes to touch upon the meaning of seeing a contemporary art exhibition which holds concepts regarding women and Asia in Japan, which was a former colonizer. The third chapter discusses the author’s intention after having interviews with some of the artists who participated in the exhibition. Recognizing the possible abuse or violence when one tries to speak about the pain of others,

artists were aware of the problems and took responsibility for expressing pain. The third chapter focuses on two video works, titled “Beast of Me (2005)” and “Foreign Sky (2005)” by Soni Kum (1980-). The author tries here to make a critical approach towards a reaction by an audience who watched the artist’s work, with references from *Sengo-sekinin-ron* (戦後責任論) by Takahashi Tetsuya (2005). The last chapter discusses the status of double minority proposed for ‘Asian women’ by the exhibition and the responsibility of the audience together with the role of the art museum and the significance of the exhibition itself.

勢に対し、鑑賞者としての私の立場が持つ「加害者性」に留意すべきだということに私は気が付かされたのでした。琴仙姫は、特に日本の植民地支配がもたらした暴力とジェンダーの表象を深く考察し、展覧会出品作の中で筆者にとって最も強く印象に残る作家の一人です。彼女の二つの作品、《獣となりても》(2005 年)と《異郷の空》(2005 年)についてその内容と、それに対する鑑賞者の応答可能性について考察しています。

高橋哲哉は『戦後責任論』(講談社学術文庫、2005 年)の中で「私が自分だけの孤独の世界、絶対的な孤立から脱して、他者との関係に入っていく唯一のあり方」としての「応答可能性」について議論しています。彼の議論を手掛かりに、私は、作家とのインタビューの中で伺ったある鑑賞者の反応について、筆者の鑑賞者としての立場から批判的な分析を試みています。こうした観点から「アジアをつなぐー境界を生きる女たち 1984-2012」において、琴の作品が出品されたことはことのほか重要なのです。

最後に第四章では、展覧会の分析と先行研究からの議論を踏まえて、展覧会において女性とアジアという観点から見ることのできる「二重のマイノリティ」性という問題に対して、美術館の果たす役割を、展覧会の開催意義と合わせて考察しました。

参加型リサーチ・ラボとしてのRadio Kosaten

Illegitimate Bodies: Radio Kosaten as a Participatory Research Laboratory

ジョン・パイレズ Jong PAIREZ

2016年に東京でスタートしたRadio Kosatenは移民とプレカリアートによる共同リサーチ・プロジェクトです。このプロジェクトはメディア・テクノロジーやアートの媒体とされるラジオを、さまざまな出会いを育む共同の実験室として再構築しています。相入れない主体とそれぞれの関心が共存するスペースであるこのラジオ・プロジェクトは、多くの人に共有される「生活条件としての不安定さ(プレカリアートであること)」の間主體的な表現を可能にすることを目標にしています。「体現化された批評の原理」という枠を参照しながら、この論文はラジオ・プロジェクトの共同リサーチをプロジェクト自体の不安定で変化に富む構造と過程を通して分析しています。またこのラジオ・プロジェクトで見えてくるアートのソーシャル・プラクティスを、反社会性の展開からみたクィア理論による批判を通して解体することで、アート実践とキュレーションそれぞれの分野への新たな視点の提唱を試みました。

Radio Kosaten is a migrant and precariat-run collaborative research radio project that started from Tokyo in 2016. This project rethinks radio as a media technology or an artistic medium and recreates it rather as a shared laboratory space for encounters. As a laboratory space commonly shared by incompatible subjectivities and their self-interests, this radio project rather aims to enable an intersubjective articulation of precariousness as a shared condition in life. Using embodied criticality as a frame of reference, this thesis examines the collaborative research of the radio project by looking at its volatile structure and processes. Moreover, by touching upon



①だめ連 / Dameren



②カンボジア労働者 / Cambodia Workers



④ひきこもり / Hikikomori



③No Limit! Tokyo



⑤沖縄移民 / Okinawa Migration

①だめ連 / Dameren

Dameren pioneers, Pepe Hasegawa and Koichi Kaminaga, recalls their early days as they tackle the issue of work culture and precarity in Japan today. April 2017

②カンボジア労働者 / Cambodia Workers

Foreign trainee workers from Cambodia share their terrible working experience with Japanese employers and co-workers. They also gave important labor rights advice in Khmer language to fellow Cambodian workers in Japan. June 2017

③No Limit! Tokyo

Radio Kosaten invited the artists, researchers, and curators from mainland China and Hongkong who participated in the inauguration of No Limit! Tokyo, a weeklong festival held annually by a network of activists and poor young people from East Asia. September 2016

④ひきこもり / Hikikomori

Shimada Takuya, a hikikomori sympathizer, spearheaded a sensitive dialogue between hikikomori and non-hikikomori participants by rooting into the social pressures of work and productivity that consequently results to reclusiveness. September 2017

⑤沖縄移民 / Okinawa Migration

Hannah Zulueta, a Sociologist, presented her research on returnee migrants in Okinawa and the predicament of invisible minorities who are third generation Okinawan-Japanese. July 2017

©Radio Kosaten collaborative research session, 2016-2017. Photo by Emma Ota

the anti-social turn in queer theory, this thesis interrogates the artistic social practice implied in the radio project. By rethinking social practice from the negativity of the anti-social turn in queer theory, this thesis hopes to propose a different contribution in the respective fields of arts and curation.

Keywords:

—Research, Anti-Social Practice, Radio Laboratory, Paracuratorial, Artistic Research

ブリュノ・ラトゥールによる展覧会実践の展開

The Development of Bruno Latour's Exhibition Practice

鈴木 葉二 Yohji SUZUKI

※アカデミック版の論文要旨は英文をご参照ください。

修士論文では、もともと科学人類学者であったブリュノ・ラトゥールの科学論的関心が、展覧会というメディアでどう展開されてきたかについて論じています。この論点は少なくとも二種類の関心に応えるものと考えられます。ひとつは、人新世におけるアートとはどのようなものか。もうひとつは、今まさにアート界が受容しようとしている、ラトゥールの考えのエッセンスは何か。

ラトゥールは2017年の「Art Power 100」でいきなり9位にランクインしました。この流れには現代思想的な背景もあるようですが、小論では、人新世的な状況認識において、科学論の知見とアートの方法論が必然的に結びついたという点を強調しています。人新世という流行語は、人間活動が地球全体に及ぼしている影響の大きさを物語るものですが、同時に巨大科学と人々の価値判断が分かちがたく結びついていった状況をも指しています。気候変動をめぐる反応の多様さが示す通り、判断の指針となるべき科学的「事実」の確かさは揺らいでいます。この揺らぎは、事実と価値の混ざり合いをどう見るかによって生じています。そこで、科学論と美学の交点がポイントとなる。これが、ラトゥールが描く人新世におけるアートの筋書きではないかと思います。

科学論者としてのラトゥールは、ある事実が制度化される過程に着目し、人間と非人間の働きを等価に見ることで、既存のカテゴリーを取り払う新しい議論を展開し



View of the exhibition »Reset Modernity!«, April 15–August 8, 2016, ZKM | Center for Art and Media Karlsruhe, © Photo ZKM | Center for Art and Media, Photo: Jonas Zillius

Bruno Latour's actor network theory and discussion of the anthropocene are mainstays of contemporary art theory and exhibitions. While these frameworks are fruitfully employed by an increasing number of curators interested in interdisciplinary exhibition practice, their overuse can inadvertently lead to exclusivist exhibitions. Put another way, the overreliance of curators on academic concepts risks inaccessibility for the general audience.

In a world where climate change complicates the binary between the natural and the artificial, interdisciplinary thought that takes into account the field of science is undeniably important. Therefore, this thesis tries to concretely articulate potentialities for interdisciplinary curatorial practice by examining the methodology

and thought of anthropology of science which informs Latour's research interests. In addition, I will also explore the intersection between his science studies and exhibition practice.

The medium of the exhibition is crucial to understanding Latour: his work is characterized by both a specialist's approach to science and a desire to present his research in rhetoric more accessible to the general audience. Latour's experience of in depth laboratory studies from the 1970s is reflected in his practice of "thought exhibitions," which he refers to as "thought experiments." Additionally, Latour remains dedicated to interdisciplinary dialogue, having continually responded to criticism and misreadings of his texts by the scientific and sociological communities. These aspects

of his project have not been carefully examined in relation to contemporary art theory.

To shed light on the theoretical advantages of Latour's practice in relation to art theory, I will develop my argument along two lines: the history of two exhibitions Latour participated in before ZKM ("Les Immatériaux" by Lyotard in 1985 and "Laboratorium" by Obrist + Vanderlinden in 1999) and a comparative analysis of his thought with Claire Bishop and Boris Groys. Through these two different approaches, I will pursue the core of Latour's exhibition practices and offer a method by which to interpret it.

If arguments on the anthropocene propel a mixture between the real and the fictional, and hence the bifurcation of reality and

てきました。その一方で彼は現代美術というジャンルに、既存の制度を検証し、破壊し、再創造するノウハウが蓄積されていることを見出しています（2002年の「聖像衝突」展）。こうした観点が、展覧会を「思考実験」の場と見なす発想に繋がっています。「リセット・モダニティ！」（2016年）というタイトルが示す通り、彼の展覧会は実験室のように、既存概念を自由に組み替えてリセットし、新たな指針を探すための場所として構想されてきました。それがいわゆる前衛的身振りとしての「実験」や純粹に抽象的な理論と異なる点について、小論では論じています。

小論でラトゥールと比較するために引いたボリス・グロイスの理論に、美術館の中は虚構と物語の世界で外は現実の世界、という構図があります。面白い論点ですが、グロイスはこれを突き詰めて、美術館内における作品鑑賞の崇高論まで話を抽象化しました。これに対してラトゥールは、美術館の虚構性を思考実験のフィールドとして活かし、あくまでも現実を柔軟に認識し直すための装置として展覧会をアクティベートしています。この姿勢によって彼の展覧会は、美術館の中と外を連関させる実践的な思考の場となっています。

筆者は現在、ラトゥールがキュレーターを務める「クリティカル・ゾーン」展（仮題、2020年ZKMにて開催予定）のためのスタディグループに参加中。

fiction is no longer valid, the only distinction left in exhibition practice and audience appreciation is the mundane boundary between the inside and the outside of the exhibition: the museum walls. My study of the "Reset Modernity!" exhibition will show that thought based on this physical boundary are more effective than struggling against any kind of metaphysical boundary, especially when it comes to interdisciplinary curatorial practice.

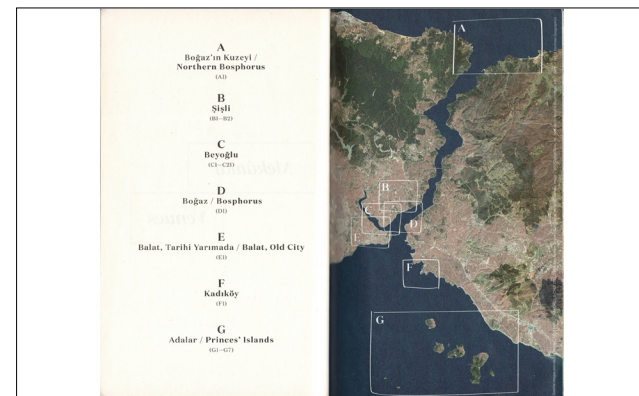
2015年のイスタンブール・ビエンナーレにおけるキャロリン・クリストフ＝バカルギエフのキュレーションとカートグラフィについて：——キュレーションにおける「新しい唯物論」とフェミニズム

On Curation and Cartography of Carolyn Christov-Bakargiev's Istanbul Biennial 2015 :
New Materialism and Feminism in Curation

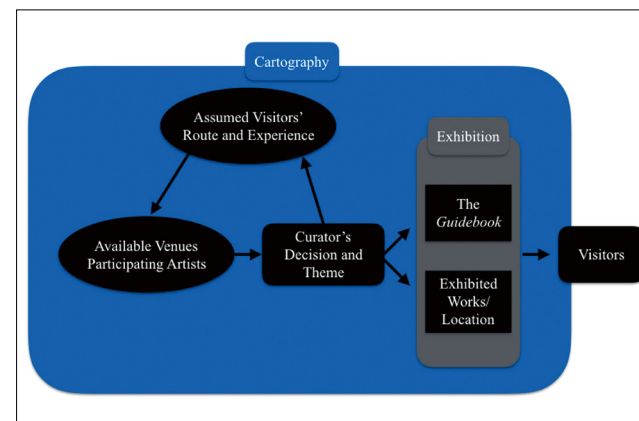
内海 潤也 Junya UTSUMI

この論文は、キャロリン・クリストフ＝バカルギエフによって「起草された」2015年の第14回イスタンブール・ビエンナーレを研究対象としています。研究目的は、この展覧会がどのような政治性をもっているのかを明らかにすることに加えて、捉えづらい構造をもつこの展覧会を適切に記述する方法を見つけ出すことです。分析対象は彼女のカートグラフィー（地図作成法）であり、彼女自身や参加作家、展示作品、鑑賞者それぞれについてではありません。代わりに、レヴィ・ブライアントが提唱する「オント・カートグラフィー（物-地図作成法）」を手法とし、展覧会を構成する存在体たちに優劣を設けず、それらの間での「作動」に注目しました。つまり、特定の会場に置かれた作品、鑑賞者が描くであろう認識上の地図、展覧会の出版物の一つである『ガイドブック』、これら三つが互いにどう作用し展覧会を構築していくのかを考察したのです。

主に、「海峡」と名付けられた空間にある他の作品とダリア・マーティンの《感覚実験》、三ヶ所にあるローレンス・ウィナーの《寸前》、そして南端に位置するシプリアーダ島近海にあるピエール・ユイグの《深海平原》を取り上げ、検討するために「新しい唯物論」とフェミニズムのつながりを紹介しました。また、クリストフ＝バカルギエフが携わった第16回シドニー・ビエンナーレ（2008年）とドクメンタ13（2012年）との比較を通して、彼女のカートグラフィーが何を重



〔図1〕イスタンブール・ビエンナーレ2015の7つのエリアを表した地図。以下から抜粋、Guidebook, ed. Süreyya Evren (Istanbul: Istanbul Foundation for Culture and Arts, 2015), 2-3.



〔図2〕本論文内で定義する「カートグラフィ（地図作成法）」の範囲を表した図。著者作成。

are mainly artworks situated in particular venues, the assumed cognitive map of the audience, and the *Guidebook*, which is one of the publications for the biennial. In other words, the interactions between these three entities is what this thesis tries to shed light on. The works in particular venues taken here are threefold: Daria Martin's *Sensorium Tests* along with other objects in "The Channel," which was an exhibition-within-exhibition in the center venue, Lawrence Weiner's *On the Verge* in three different venues, and, Pierre Huyghe's *Abyssal Plain* in Sivriada, which was the southernmost venue. When exploring these works, this study introduces the relation between new materialism and



〔図3〕ダリア・マーティン《感覚実験》2012年、HDビデオに変換された16mmフィルム、音。「海峡」内での展示風景。著者撮影。



〔図4〕ローレンス・ウィナー《寸前》2015年、言語＋参照された素材。イスタンブール近代美術館での展示風景。著者撮影。

feminism. Through comparisons with her previous exhibitions, the 16th Biennale of Sydney 2008 and dOCUMENTA(13) 2012, it will be observed that Christov-Bakargiev's cartography of the international exhibitions develops as time proceeds, and achieves a certain method of actualizing the Klein bottle model, which is a "3D Möbius strip, a structure where inside and outside can switch places, in the form of an exhibition." Through the investigations, it can be claimed that the exhibition serves as a critical form of essentialist discourse and patriarchal ontology. The organic design of the exhibition presents another approach to the political from direct, avant-garde politics. Furthermore,

ねる毎に発展し、最終的には「クラインの壺」の構造を展覧会として実現させるまでに至ったことを明らかにしました。

これらの分析を通して、第14回イスタンブール・ビエンナーレが本質主義的な言説や男性原理に基づく存在論に対する批判として機能し、この展覧会が作動させている有機的な構造は、直接的な政治行動とは異なった政治性への道を示していることを明らかにしました。この研究が用いる手法は、唯物論の視点から行う展覧会研究の可能性を開示しています。この手法は、美術史や美術の制度が作り上げてきた還元主義と二元論を避け、展覧会の本質ではなく、展覧会における動的な作動を捉えることを可能にします。最後に、この展覧会が、支配的な展覧会形式に対して批判的であり、本質主義言説では把握できず、人間中心の存在論に懐疑的であり、一般化された二項関係の間に浸透していることにより、非常に政治的であることが明らかにされます。

[Figure.1] The general map of the seven areas of Istanbul Biennial 2015. Scanned from *Guidebook*, ed. Süreyya Evren (Istanbul: Istanbul Foundation for Culture and Arts, 2015), 2-3.

[Figure.2] A diagram shows the designated area of "cartography" in this thesis. Created by the author.

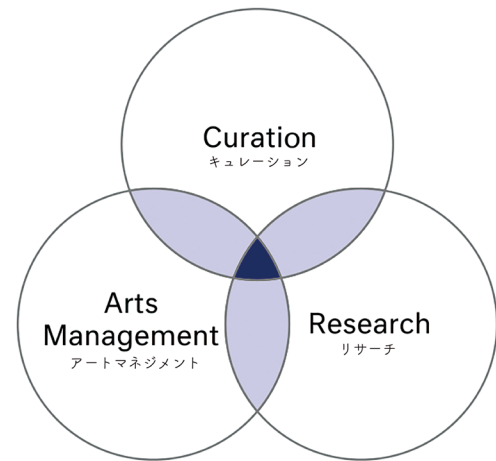
[Figure.3] An installation view and a still image from Daria Martin, *Sensorium Tests*, 2012, 16mm film transferred to HD video, sound. Taken by the author.

[Figure.4] An installation view in Istanbul Modern of Lawrence Weiner, *On the Verge* (Ramak Kala), 2015, Language + the materials referred to. Taken by the author.

This thesis examines the 14th Istanbul Biennial: *SALTWATER: A Theory of Thought Forms 2015*, "drafted" by Carolyn Christov-Bakargiev. The purpose is to reveal what kind of politics the exhibition operates under and to find a proper way to put the elusive structure of this exhibition to words. The thesis analyzes her cartography of the exhibition, however, neither only about herself, participating artists, exhibited works, nor audiences. Taking the standpoint of "onto-cartography" that Levi Bryant proposes, it investigates "operation" among entities that compose the exhibition, avoiding the establishment of hierarchies among them. The entities which this investigation deals with

the methodology this study takes shows the possibility to research exhibitions from a materialistic perspective. It would be thus possible to avoid the reductionism and dualism that the prevailing system in the history of art and art institutions has established. As a consequence, it enables us to grasp dynamic operations within exhibitions rather than identifying the essence of them. In the end, it will be clear that the biennial becomes quite political by being critical of the predominant form of exhibitions, being ungraspable by the essentialist discourse, being skeptic of anthropocentric ontology, and being dissolvable in between the prevailing binary divisions.

GA (東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科) とは About Graduate School of Global Arts



東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 (GA) は、音楽、美術、映像に続く 4 番目の大学院として 2016 年 4 月に創設されました。世界との交流を通じて、変幻する現在の、多様な価値観に新たな文脈を提示すべく、芸術文化活動を構想・実践し、かつ理論化できる人材を育むことを目指しています。本研究科アートプロデュース専攻では、キュレーション、アートマネジメント、リサーチの 3 つの研究領域を交差・横断しつつ、芸術と社会の関係にアプローチしています。

The Graduate School of Global Arts (GA) was launched as the latest addition to the Tokyo University of the Arts in April 2016, with the intention of enabling students to become creative professionals who can not only develop and curate arts and cultural practices, but also critically examine those cultural practices in an attempt to present new contexts and to unveil the diverse, changing values in today's society. GA's Department of Arts Studies and Curatorial Practices focuses on three fields of concentration: curatorial practices, arts management and research.

● 教員紹介_Academic Staff



熊倉 純子
Sumiko KUMAKURA
教授 Dean, the Graduate School of Global Arts.
Professor in Art Management and Cultural Policy Studies

専門はアートマネジメント・文化政策。「取手アートプロジェクト」や「アートアクセスあだち—音まち千住の緑」など地域型アートプロジェクトに携わりながら、アートと市民社会の関係を模索し、文化政策を提案している。東京都芸術文化評議会文化都市政策部会委員、文化庁文化審議会文化政策部会委員などを歴任。監修書に『アートプロジェクト—芸術と共創する社会』など。

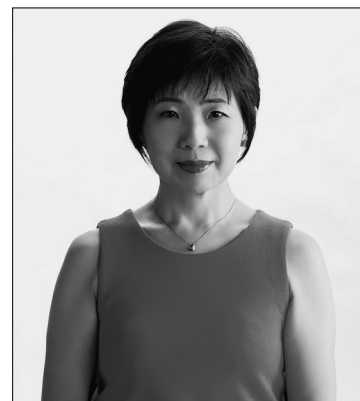
Kumakura has been a leading figure in the field of art management in Japan since she launched the first art management program in a national art university in Tokyo in 2002. She is actively involved in numerous community-based art projects and works as an executive producer for the Toride Art Project and Art Access Adachi. Currently she serves in many positions, including on the advisory board for cultural policy in the National Agency for Cultural Affairs and the Tokyo Metropolitan Government.



箕口 一美
Kazumi MINOGUCHI
講師
Lecturer in Music and Performing Arts Management

専門は音楽マネジメント。カザルスホール企画室「アウフタクト」、サントリーホールプロジェクト・コーディネーターなどを歴任し公演制作や海外からの招聘演奏家の日本ツアー制作を行う。2016 年より現職。演奏家のキャリア・マネジメント研究を進めている。

Minoguchi joined in GA in 2016 after a long experience in artistic programming and administration at performing arts venues including Casals Hall (1987-2000) and Suntory Hall (2008-2016). She is also a keen advocate of community engagement programs with musicians she had developed. Career development of young musicians is one of her life-long interests.



長谷川 祐子
Yuko HASEGAWA
教授
Professor in Curatorial Studies

専門はキュレイトリアル理論、近現代美術史。東京藝術大学大学院修了。金沢 21 世紀美術館学芸課長及び芸術監督、東京都現代美術館チーフキュレーターを経て、現在、同館参事。イスタンブール、サンパウロ、シャルジャ、モスクワ・ビエンナーレなど、国内外で多くのインディペンデント・キュレーションを行う。著書に『「なぜ？」から始める現代アート』、『キュレーション 知と感性を揺さぶる力』ほか。

Hasegawa is currently an Artistic Director at the Museum of Contemporary Art in Tokyo and previously a Founding Artistic Director at the 21st Century Museum of Contemporary Art in Kanazawa. She has been an advisor, commissioner or curator of numerous biennales including Moscow Biennale (2017), Sharjah Biennial (2013), Venice Architectural Biennale (2010), São Paulo Biennial (2010), Venice Biennale (2003), Shanghai Biennale (2002) and International Istanbul Biennial (2001).



住友 文彦
Fumihiko SUMITOMO
准教授
Associate Professor in Curatorial Studies

専門は戦後美術研究、美術館や美術の制度と社会の関係。NTT Intercommunication Center (ICC)、東京都現代美術館などを経て、現在、アーツ前橋館長。主な企画展・国際展に、「ヨコハマ国際映像祭 2009」、共同企画展に「メディア・シティ・ソウル 2010」、「別府現代芸術フェスティバル 2012 混浴温泉世界」、「あいちトリエンナーレ 2013」など。

Sumitomo is a director of Arts Maebashi and a co-founder of Art Initiative Tokyo. He previously worked as a senior curator at the Museum of Contemporary Art in Tokyo. He co-curated the Aichi Triennale 2013 (Nagoya), Beautiful New World: Contemporary Visual Culture from Japan ("798" Dashanzi Art District and Guangdong Museum of Art, Beijing, 2007) and Media City Seoul 2010, and was the Artistic Director of the Festival for Arts and Social Technology Yokohama (CREAM) 2009 and curator for Beppu Art Project 2012.



枝川 明敬
Akitoshi EDAGAWA
教授
Professor in Cultural Policy Studies; Cultural Economist

専門は文化政策、文化経済学、地域文化振興論。文部省（現文部科学省）、総務省、文化庁を経て 1995 年埼玉大学大学院政策科学研究科助教授。政策研究大学院大学、国立情報学研究所、名古屋大学教授を経て、2004 年より東京藝術大学教授。主な著書に『文化芸術への支援の論理と実際』、『新時代の文化振興論——地域活動と文化施設を考える』、『文化芸術への支援の論理と実際』など。

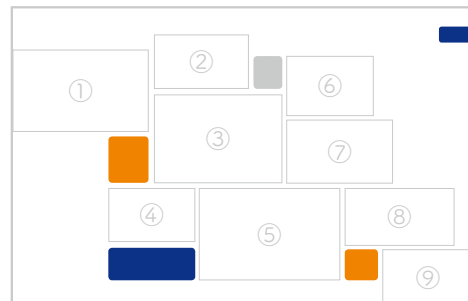
After starting his career as a national government officer at the Ministry of Education, Science and Culture in 1977, Edagawa served at various organizations including the Ministry of Internal Affairs and Communication and the Agency for Cultural Affairs. Since 1995, he has worked at the Saitama University, served as a Councilor of the Higher Education Dept. of the Ministry of Education Culture, Sports, Science and Technology, at the National Graduate Institute for Policy Studies, and at the Nagoya University. He was appointed a professor at Tokyo University of the Arts in 2004.



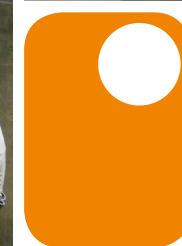
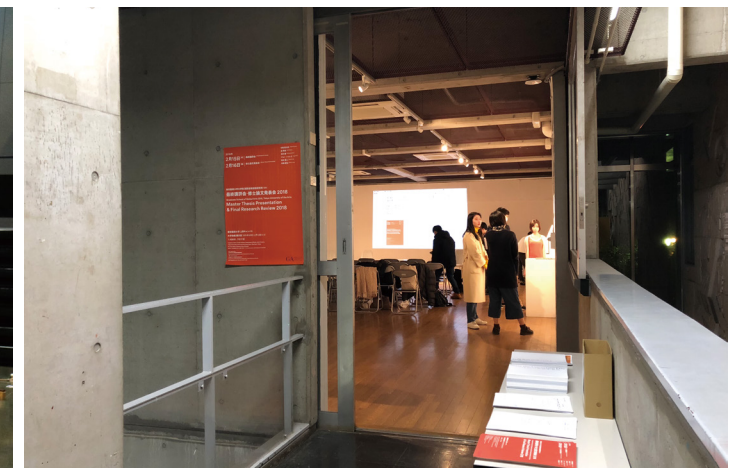
毛利 嘉孝
Yoshitaka MÖRI
教授
Professor in Sociology and Cultural Studies

社会学者。文化研究・メディア研究。九州大学大学院助手、助教授、東京藝術大学音楽学部准教授を経て 2016 年より現職。主な著書に『ストリートの思想——転換期としての 1990 年代』、『文化 = 政治：グローバリゼーション時代の空間叛乱』、『増補 ポピュラー音楽と資本主義』、編著に『アフターミュージッキング』、『アフターテレビジョンスタディーズ』など。

Professor in Sociology and Cultural Studies. Mōri's research interests are postmodern culture, media, art, the city and transnationalism. Known as a pioneering scholar of cultural studies in Japan, he has published numerous essays both in English and Japanese in international journals including *Inter-Asia Cultural Studies* (Routledge), *International Journal of Japanese Sociology* (Wiley-Blackwell) and *World Art* (Routledge).



- ① GA 学生企画展「Seize the Uncertain Day——ふたしかなその日」撮影：富田了平 / The Exhibition "Seize the Uncertain Day" Curated by GA Students photo by Ryohei TOMITA (2017.3.18-4.5)
- ②平成 29 年度入試説明会 / Entrance Examination Orientation Meeting 2017 (2017.6.21)
- ③グローバル時代の芸術文化概論 マシュー・フラー / Special Lecture Art and Culture in the Age of Globalization: Matthew Fuller (2017.7.11)
- ④グローバル時代の芸術文化概論 ミゲル・ソーサ / Special Lecture Art and Culture in the Age of Globalization: Miguel Sosa (2017.7.21)
- ⑤グローバル時代の芸術文化概論 マイケル・スペンサー / Special Lecture Art and Culture in the Age of Globalization: Michael Spencer (2017.10.8)
- ⑥授業風景 / A Seminar (2017.10.8)
- ⑦グローバル時代の芸術文化概論 ニコラ・ブリアー / Special Lecture Art and Culture in the Age of Globalization: Nicolas Bourriaud (2018.1.10)
- ⑧⑨最終講評会・修士論文発表会 2018 / Master Thesis Presentation and Final Research Review 2018 (2018.2.15-16)



GA

東京藝術大学大学院
国際芸術創造研究科
アートプロデュース専攻